

短歌

目を閉ぢて

柴

舟

ものいはず目閉ぢてひとりわが居れば世界しづかに遠ざかりゆく
 まなぶたの限りにあたり折れかへりわが沈思の世ひろごれるかな
 入りまじり亂れあひつつ綾を織る思へる事と見ゆるすがたを
 をりくくに近うなりては遠く消ゆ夢の世界のこまかきりすむ
 夢に入らず現にさめぬこの今の心をなにの心といふや
 へだたりもひろこりもなく人の世のものぞつごへるまなぶたの中
 青きものはた黄なるもの赤きものみだれよりきて夢にいざなふ
 夢にゆく心をくかへるらしまたもこの世の物音をきく
 あかるきにあらず暗きにはたたがふ中を行きかふ知れる人々
 人の世の日のかげさせば一齊に紅う燃えたつ今のわが世や

南下北上

賛助員河崎

つ

しばらくは北海道を忘れよと洗面所にてかほ洗ひをり
 洗面所蛇口ねぢればほどばしる水よ親しき寄宿舎の水
 已が植ゑし楠の木いたく丈のびぬ北海道にて何してありけむ
 古ピアノ廊下の隈にいまもあり下手ながらにもよく弾きしかな
 病室の暗き窓がらす我がありし二年まへにも曇りてありき
 女学校の生徒等とわが毬なけし芝生にきたりひとりまりなく
 お茶の水九段坂下小川町などいふ名もなつかしきかな
 思ひおもひに何かなさむと一月の休みを東京に集りし友等
 何といふ楽しく悲しきあつまりぞ友等老いたり友等おいたり
 東京に来てことごとく涙するあさましき我いとほしき哉
 大なるいつはりごとくをきく如く物のひびきのかなし東京
 誰にも誰にも逢ふこといやになりて是歌かきつけて北海道に歸らむ
 鳥のなく如く歌よみ鳥の死ぬごとく死ななむ北海道にて
 お茶の水の橋とやらかし自動車のつきくゆけどかはりもなし

わが上に都のひびき何あらむ何あらむとは知りてあれども
 華やかに笑へる友をひとりひとり暗につれ行き話してみたし
 さきのほどぬくひし熱きかのなみだいま一度とおもへどいでこず
 はる／＼と北海道より來し我を知らずかほにも馬くるまゆぐ
 様々のひびきにあふれ終日東京はありその中にいく
 南より北より人の集れる廣小路にも寂しさのあり
 電車とまりぬ吐き出されしさまの人の獨りの我のいとほしさ
 何すどて都に我のきたりけむかく思ひつゝ西東する
 多摩川の堤にたちて雲をみむ都にこしはそれだけのこと
 ○
 いま私の東京をさるることにかゝはりもなく人のゆきかふ
 電車つとテイシャバマへにとまりけり又四百里の旅ははじまる
 大なるみにくきものに離れゆくやうに覺えて東京をたつ
 わが去るを東京の街おごろかすわが來しときもおごろかざりき
 何かあらむ何かあらむと東京を離れてひとり來はきつれども

東京のたゞになつかしたそかれの空に仰ぎしニコライの塔

餘白に

天長節に初雪が降つてからは毎日霰や霰の日ばかりでした。そして今日は最も荒く吹雪いで居るのです。山も丘も街も人もすべての物の色と形とを奪つて吹雪は職員室の窓外に小樽の天地を晦暝にしてゐます。朝靄のしつとりと落ち付きのある朦朧に比べて、何といふ慘ましい吹雪の晦暝であらう。その小さい雪片の一つ一つが遣り所のないいら／＼しさに矢鱈と狂ひ廻つて居るのです。ビューと細い高い而して鋭い聲は夫等の小さい者の叫びが一つになつてひびくのでは無いでせうか。そして其の間にひびく、轟といふ太いうなりは慄うした中に威丈高な冬の傍若無人な歌であるかも知れません。明日も明後日も……來年の三月迄殆ど半年の間こんな日の續くのが北海道です。かうした中で人は何を考へて居るのでせう。私は、私は去年「冬が齎す生の嚴肅」と言ふ様なことをしみ／＼思はされました。日本海岸に住む一人の友から其頃呉れたダークシー、ダークスカイ、ダークハートと言ふ句の書かれた端書を今も藏つてあります。東京の菊は今真盛りでせう。京都の通天橋の紅葉も未だ散らないでせう。四國は、中國は、九州の筑後平野には櫨の紅葉美しく濃い緑の葉蔭に朱纒が温い滑な肌から高い香を吐いて居るのでは無いで

せうか。更に琉球臺灣は、……同じ日と月との許に生きて居る私共ではありますけれ共、夫れ夫れの異つた四圍の物象に應はしい氣分に溢れてあるのでせう。とにかく私は今こんな氣持で去る夏休み頃の手帳のペーシを繰つて如上の歌をかきつけました。(十一月十日午後四時記す)

贊助員 岡田ひさ

何故とおもはずたゞにすごし來しをどめのわれは安かりしかかな
自らが信せぬことをとく人の空虚のこゑをきくいとはし
あかしくと秋の日うけてれる山にふさはすわれの暗き心よ
見つむれば涙にじみ來夢のごと淡路の瀬戸にまたく灯
落葉たく煙ほそく立ちのぼる並樹の道をゆくまひるかな
冬枯の庭は淋しも風ふけば落葉栞葉のひそくとなく

文科四年生

岡田いし

夜はあけぬ日は高うなりまた落ちぬ汽車は西へ
となほも走れる

わかのれる汽車たゞひとりまよなかの大天地を
横きりてゆく

青丹よし奈良のみやこと知りもせで小草はむら
む春日野の鹿

いにしへの天の香具山なつの來てすかしく
もみつえさすかな

つかれたる目には花かと汽車のまと葉うらの白
うひかる木を見る

心ふとかるからぬ罪得しことし母はまだ見す西
のみやこそ

かへり來て電車のなかに身はおけとまた旅人の
こゝちこそすれ

田邊馨

ふといひし言の葉人につらかりきかく知りし時
涙ながれぬ

わが村の岸につきなはこの心忘れむと思ふ船の
中かな

風つよくふく夜は少さき我夢のたゞ安かれと祈
りてぞぬる

相馬芳枝

書にもなく師にも學ばず我生の立場を何處如何
に求めむ

學び來て二十になりて驚きぬモサイツクにも似
たる心よ

死ぬ場より辛く逃れて夢さめぬ生きむと悶く吾
なりしかな

救はるゝものならねども溺れ人藁とるこゝちせ
めて書をよむ

何事も身細るまでは思ひえぬかひなき吾といつ
かなりにし

柳下三己

けふの日のすべき事など數へつゝ朝起の鐘まつ
がたのしき

いつはらぬ我みつからをこの夏もあらはしにけ
り母のみ前に

音はせで葉なき梢のうらゆらく玻璃窓ごしの秋
のあはれさ